古文視写「あきあはせ」　　樋口一葉

名前（　　）

「雁がね」

▽朝月夜のかげ空に残りて、見し夢の名残もまだ現なきやうなるに、雨戸あけさして打ちながむれば、さと吹く風竹の葉の露を払ひて、そゞろ寒けく身にしみ渡る折しも、落ちくるやうに雁がねの聞えたる、ひとつなるは猶さら、連ねし姿もあはれなり。△

「虫の声」

▽垣根の朝顔やうやう小さく咲きて、昨日今日葉がくれに一花みゆるも、そのはじめの事おもはれて哀れなるに、松虫すゞ虫いつしか鳴き弱りて、朝日まちとりてこほろぎのはかなげに声する、小溝の端、壁の中など有るか無きかの命のほど、老いたる人、病める身などにて聞きたらば、さこそ比べられて物がなしからん。

「雁がね」

▽

△

「虫の声」

▽